

歴史探訪

クラブ!

其の129

History Inquiry Club



文化財課 ☎23局 3635
FAX 22局 3811

九州からやってきた「宝物」

今回は、最新の発見を一つご紹介いたします。

熊本大学の大坪志子助教おおつほのりこから、渥美半島で発見された縄文時代の玉を調べたいという連絡がありました。その目的は、九州産の石材の玉の分布を調べるためということでした。

縄文時代において、現在の寶石のように大事にされた石に、新潟・富山県境産のヒスイがあげられます。渥美半島でも、縄文時代のヒスイの玉が見つかっています。しかし、今

でも250 km離れたヒスイの原産地である新潟・富山県境に行こうとしたら、車で高速道路を走ってもずいぶん時間がかかります。ましてや、その土地も馴染みがありません。では、そんな遠方からやってきた「宝物」に、縄文人はどのような思いを抱いていたのでしょうか。

写真は伊川津貝塚で発見されたヒスイの玉で獣をまねた形です。大きさは2.5cmもあり、田原市で一番の超高級品です。

さて、大坪さんが探し求めていた九州産の石材の玉は、吉胡貝塚の出土品の中から見つかりました。直径8.5mm、厚さ3mmほどの小さな玉です。含クロム白雲母片岩しろうももへんがんという石で、ヒスイにも負けない緑色をした美しい石です。ヒスイは長い間、産地不明の石として扱われ、日本での原産地が判明したこともこの50年ほど前の話です。

これらの劇的な発見や、その神秘的な魅力から、緑色の玉はヒスイであるという先入



●ヒスイの玉(伊川津貝塚)



●九州産の石材の玉(吉胡貝塚)
※吉胡貝塚資料館で展示中

観が生まれました。そこで九州にも、ヒスイとされた玉が見つかっていました。大坪さんがそれらの石を分析したところ、その7割が九州産の石で、ヒスイではないことがわかりました。さらに調べると、その石の流通は東にも広がり、ヒスイの原産地にまでいきわたっていることが分かりました。ヒスイでも驚いたのに、600 kmも離れたところから来たとは、縄文人のエネルギーのすごさを感じました。確かに九州産の玉は、渥美半島にあったのです。

美しい緑色の石の本来本元であるヒスイの産地にまで及んだこの石は、美しい緑色へのこだわりから、九州地方から流行したものでしょう。東高西低とされた縄文文化で、西からこれほどまでの影響力を持つ

た物はないかもしれません。この玉は、そういったことから研究者にとっては、今でも立派な「宝物」なのです。

落としたらなくしてしまいそうな小さな玉は、縄文人によって想像もつかない長旅を経て、渥美半島にもたらされました。いったいどのような旅をしたのでしょうか。渥美半島の人々が九州を訪れたのでしょうか？それとも何人かによって届けられたのでしょうか？この玉と交換に与えたものは一体何でしょうか？

調査を終えた大坪さんが、「よくぞこんな遠くまで来てくれたね」と小さな玉に話しかけていた姿と、玉を愛おしく見つめる縄文人の姿が重なるように印象的でした。

(増山)

今月の「表紙」

▼街なかのイルミネーションを撮影しようとして、輝く光を表現したくて、あっちに行ったり、こっちに行ったり。そして、最終的に決めたアングルは、道路の向かい側にある茂みの横からでした。しゃがみこんで、下から覗き込むように写す私の姿は、さぞ怪しかったでしょうね。(O)

【表紙の写真】中央広場付近のイルミネーション